メキシコの工業水準と成長要因

水　野　　一

メキシコはＬＡＦＴＡにおいてブラジル，アルゼンチンと並んで"域内先進国"とみなされているが，ことにその安定的な経済発展は注目されており，「ラテン・アメリカのモデル国」とか「西半球の日本になりうる可能性をもった国」などといわれている。本報告では，メキシコの経済水準，特にその工業水準をブラジル，アルゼンチン両国と比較して検討するとともに順調な経済発展をもたらした要因をあげ，今後持続的成長を達成するための課題を探ってみた。

近年，ブラジル，アルゼンチンの経済成長率がいちじるしく鈍化しているのに対し，メキシコは１９５０年以降，年平均６％以上という着実な発展をとげてきた。しかも過去６年間にブラジルの物価水準が１３倍に，アルゼンチンも６倍に上昇しているのに対し，メキシコの物価はこの間わずか１４％上昇したにすぎない。一方，１９５０－６０年の工業生産の年平均成長率をみると，メキシコは7.４％で，ブラジルの9.２％には及ばないもののアルゼンチンに比べれば２倍近い成長率である。ただメキシコのＧＤＰに占める工業の比重（１９６３年）は２２.５％で，アルゼンチンの３１.５％，ブラジルの２９.０％をかなり下回っており，また発展の余地を残していることがわかる。

以上３カ国はラテン・アメリカ全体の工業生産の約８０％を占めているが，その割合はブラジル３６％，アルゼンチン２６％，メキシコ１５％となっており，総生産高ではメキシコはブラジルの半分以下，アルゼンチンの５割強の水準にすぎない。しかしこれら３カ国の主要工業製品の生産をみると，メキシコは石油精製や化学部門でブラジル，アルゼンチンをしのいでおり，粗鋼，セメント，パルプ，テレビではブラジルについで第２位の生産をあげているなど，ブラジルにはまたかなり水をあけられているが，アルゼンチンの水準には相当接近している。

ところで，このようなメキシコのいちじるしい経済発展をもたらした要因としては，①政治の安定，②農業の役割り，③アメリカとの関係，④政府の投資誘導政策 ― の４つをあげることができる。第１の政治の安定が経済発展と深い関係にあることは，先進国，低開発国を問わず過去の多くの例がはっきり示している（たとえば２，３年前のイタリア、近年のアルゼンチン）が，メキシコの場合は１９１０年代に革命を経験し，ＰＲＩ（立憲革命党）による One

Party Democracy の形で，ラテン・アメリカには例の少ない平穏な政権の授受が行なわれてきた。しかも他のラテン・アメリカ諸国と違って軍部のカゲが薄く，労使間の対立があまりみられないことは，通貨の安定維持に有利に働いたように思われる。

第2の農業の役割りについては，メキシコの農業生産が過去30年間に年平均5.4％という高い増加率を記録したことをみれば明らかである。その結果，メキシコは現在，酪農製品や動物性油脂を除いて食糧および農業原料を自給し，さらに綿花，コーヒーなど多様化された農産物を大量に輸出し，工業化のための外貨を獲得している。もちろん，これはもとはといえば農地改革によるところが大きいわけで，「もし農地改革が行なわれなかったとしたら，メキシコの政治安定も，高い資本形成も，農業生産および生産性の上昇も実現しなかっただろう」（Edmundo Flores）とされている。

第3の要因については，メキシコはアメリカと国境を接している結果，アメリカから資本と同時に新しい技術を吸収することができ，一方多額の観光収入（3億ドル余）のおかげで国際収支の均衡を保つことができた。第4はもっぱら工業化政策についてであるが，メキシコ政府はいろいろな手段を使って国内工業の育成に努めてきた。たとえば，関税や輸入統制によって国内産業を保護する一方，財政，金融措置によって新規産業に対する内外からの投資の促進を図った。特に Nacional Financiera など政府金融機関の工業化に果たした役割りは大きい。

最後に，メキシコ経済の今後の課題をあげれば，第1に工業製品の国内市場を拡大するために農業所得を向上させ，所得の再分配を図られねばならないこと，第2に貿易収支の大幅赤字を観光収入や外資の流入によってカバーしている不安定な国際収支ポジションを是正するため，輸出，特に工業品の輸出を拡大する必要があることであろう。